

空間的

月の光に照らされて山岳のひだが四方に伸びてみた
木々の梢は針のやうにするどく
風が吹くとうすくらがりの片側の木々はもくもく動き
あかるい方の面では木の枝がこまかく光つてゆれてみた
空のひろがりの一点に存在してゐる自分なのに
自らの意志にかかはりなく
きりもみ状に
《僕は飛行をつづけてゐる
何ものかのにしかかられて ひどい重みを背負ひながら》
川は山岳のあひだを縫ひ
いそいで集まりあひ
蛇行の有様がアルミニウムの細長い切片のやうに見えた
月の光に白くかがやき
あるところでは僕の影を捉へさうにさへなつた
城郭のあたりには ともし火の赤い点が散在し
僕に向つて 怒りの口をあけて吠えてみた
ところどころ山にさへぎられて
アルミニウムの切片は見えなくなつた
川には橋がかかつてみた
その両方に道はひらひらと舞ふやうに曲り
結び目をこしらへて また それぞれの方角に散つてみた
《僕は飛行をつづけてゐる
何ものかのにしかかられて ひどい重みを背負ひながら》
草原の草の色がくすんだ緑色に照らし出されてみた
草原のつづいた先には砂礫ばかりのひろい場所が
僕をむかへ 残りの地熱の上昇で僕を押しあげた
空間の推移と時間の経過
自失した自らに問ひかける僕の自我
《僕の背負ふものは?》
《僕の飛行は?》
極限の砂礫の原野を走る一本の道
道は弦
しののめといふ名の変転は僕の自我の洞察をかきたてる爪
曲になることなくとも
琴の音の見知らぬ者の胸にとどけと
ふたたび山岳にもどりくりかへす僕の行動
眼下にはもはや真昼と
緑に燃えあがる山岳の四方に伸びるひだ

山岳のあひだを縫ひ 岸を噛み 集まりあひ 川の蛇行
赤茶けた鉄片の細長い切片はうねりくねつて流れてゐた
城郭のあたりには いくつかの四角い窓を持ち
朱色の楼台が樹間にそびえ立つてゐた